

学校評議員制度の説明と紹介

学校評議員制度をご存知ですか。平成12年1月に学校教育法施行規則の一部を改正して設けられました。次のような条項になっています。

第23条の3 小学校には、設置者の定めるところにより、学校評議員をおくことができる。

2 学校評議員は、校長の求めに応じ、学校運営に対し意見を述べることができる。

3 学校評議員は、当該小学校の職員以外の者で、教育に関する理解及び識見を有するもののうちから、校長の推薦により、当該小学校の設置者(※教育委員会のこと)が委嘱する。

このように、現在は多くの小・中学校に学校評議員がいます。評議員さんは常勤ではなく、求めに応じて学校に行き(本校の場合では学校関係者評価委員会の時など)学校教育のあり方に対し大所高所から意見を述べる、ことになっています。

甲斐市でも平成17年度から学校評議員が制度化され、今年度で5年目になります。でも多くの保護者の方々は、学校評議員という制度も本校でどなたが評議員になっているかもご存知ないと思います。本校の学校評議員さん方を紹介します。

氏名	地区	経歴	評議員歴
新津 健 さん	境南	学識経験者	平成17年度より
櫻井 みどりさん	上町北	教育関係者	平成17年度より
河野 勝彦さん	境北	地区議員	平成17年度より
磯村 修さん	敷島台	学識経験者	平成17年度より
保延 昇一さん	上町北	社会教育関係者	平成17年度より
石橋 浩二さん	吉沢	PTA 役員経験者	平成20年度より

学校評議員制度のねらいを簡単に説明します。

(1) 学校教育の一般化・普遍化

学校教育に携わっている学校職員は、(私を含め)どうしても学校側の立場で物事を考えます。ほとんどの場合、支障はないのですが、時には「学校の常識は世間の非常識」になることもあります。その時、利害関係のない第三者的な立場の方が、学校に意見したり、助言することで学校の行なう教育活動の軌道を修正することが出来ます。

(2) 組織の再生、効率化

学校では職員が一丸となって熱心に教育活動に取り組んでいます。ですが、時として、費やした労力の割には教育効果が上がらないことがあります。夢中で取り組んでいる組織内の人間にはその状況が見えないことが原因です。そんな時、岡目八目的に外からのちょっとした助言で学校教育が劇的に変化し、生氣を取り戻すことがあります。

(3) 学校教育の宣伝・広報活動

本校の職員は熱心に仕事に取り組んでいます。ところが、私たちが自分で自分をいくら宣伝しても周りからはあまり信じてもらえません。その時、第三者的な立場の評議員さんが、「北小は素晴らしいですよ。先生方は教育熱心で、子どもたちは明るく、あいさつが良くできとても良い子です。」とお話になると信憑性が高くなります。

以上述べた以外にも、評議員さんの役割はあるかと思います。評議員さん方のお力を借りながら、より良い学校づくりに励んでいきたいと思ひます。

日本の青少年って本当にダメなの

「成人の日」が1月15日から第2月曜日になり、三連休は私たち勤め人には嬉しい限りですが、私などは、「成人の日」というと今でも15日を連想してしまいます。さて、「成人の日」の前後には、若者の意識調査の国際比較が新聞に掲載されることがあります。例えば、次のような質問に対して「はい」「いいえ」「どちらとも言えない」で応え、国際比較するものです。

- ①未来は明るく希望に満ちている。
- ②人のために役立つ仕事がしたい。
- ③自分自身に自信がある。

このような調査結果の国際比較から、日本の若者は諸外国(アメリカ、中国、韓国、インドなど)の若者に比べ「はい」という肯定的な回答が少なく、

- 未来に対して悲観的で夢がない。
- 社会のためになる仕事をしよう、と考える比率が少なく、自己中心的である。
- 自分自身に自信がない。

と、あまり良い評価が与えられません。

でも、このような国際比較に私は以前から疑問を感じていました。例えば、①の未来に対する期待感です。今の世界を見渡せば、環境汚染、温暖化、テロ、世界各地で頻発する戦争など、悲惨なニュースが多く、これを見て、考え深い若者が「世界の未来は明るい」と考えることが出来ないのは分かる気がします。むしろ、明るい未来を描く若者が80%もいる諸外国の状況に危うさを感じます。(報道統制や思想統制がされている中国などは別としても)

②の人のために役立つ仕事の比率です。このことも、自分の幸せを犠牲にしてまで「世のため、人のため尽くす」ことに多くの人は納得出来ないでしょう。一般には、「まずは自分がある程度幸せになり、その後、出来る範囲で周りにも手を差し伸べる」と考えるのが普通感覚です。若者だからといって、自分の幸せは考えず、世のため、人のために尽くさねばならない、というもおかしな理屈です。むしろ、日本の若者は正直で、誠実に自分自身の人生と対峙していると言っても良いのではないのでしょうか。

③の自分自身に対する自信です。思春期の心は不安定なものです。例えば恋愛での失恋の痛手は自信の喪失に繋がります。高校入試や大学入試で難関校に合格すると自信は膨れあがりますが、その逆もあります。このような揺れ動く青年が自分自身に自信を持ってないのは自然な気持です。むしろ日本の青年は正直といえるのではないのでしょうか。アメリカ人男性が成人になるまでに争い事などで(銃で撃たれたりナイフで刺されるなど)亡くなる比率は人口比で日本の数十倍という記事を読んだことがあります。(戦争で亡くなる若者を入れない数字です)アメリカの若者は、自分自身に自信があるため大変闘争的です。その自信が打ち砕かれた時、衝動的に殺人に走るようなことがあります。

このように考えると、国際比較から言われる程には、日本の若者は悪くなく、むしろ世界の若者がまだ気づいていない世界の危険に日本の若者は気づいている先見性を備えているといえます。日本の若者は、もの静かだが、考え深く、奉仕の心を持ち、自分の身の丈にあった夢や希望を持ち、分相応の幸せ実現のため真面目に努力している、そんな姿が浮かんできます。

日本では若者の数が年々減っており、わが国の未来を考えると心配な面が多くあります。ですが、日本には、心優しく、まじめで責任感の強い若者がまだまだ多くいます。このような若者をダメ者呼ばわりして自信を失わせるのではなく、彼等の良さを認め、自信を持たせ、わが国の未来を、世界の未来を託したいものです。日本の若者の双肩に世界の未来がかかっている、そんなことを思います。いささか日本びいき過ぎる内容となりましたが、1つの見方としてお伝えしました。